



TITLE:

天文界の雑報片信

AUTHOR(S):

CITATION:

天文界の雑報片信. 天界 1925, 5(57): 377-388

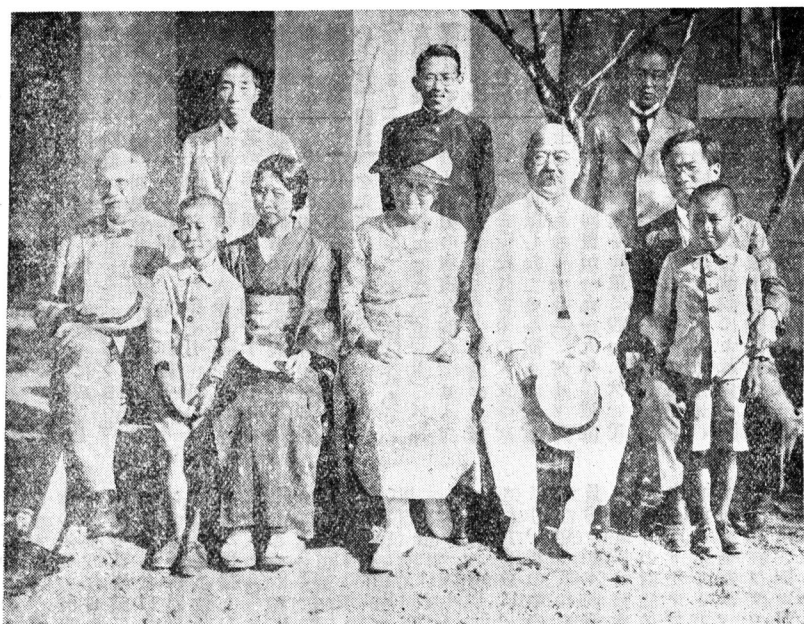
ISSUE DATE:

1925-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160301>

RIGHT:



田上 田竹 濟百
 授教ーラミ 子英 人夫ーラミ 城新 本山
 進 修

ミラー教授を迎へて

山 本 一 清

昨年の夏の或る日、自分は米國費府郊外スワースモア大學天文臺を訪れ、天文臺長ミラー(J. A. Miller)教授に迎へられたことがあつた。其の時、同教授は「來年はスマトラへ日食觀測に行く途中、日本を訪れます」と言はれ、自分は「エルカム!!」と挨拶したことを覚えてゐる。

さて、此の八月の末、果してミラー氏夫妻は神戸に着、すぐ京都へ來られた。八月二十七日自分は先づ京都ホテルに氏を訪ひ、次いで翌々二十九日朝早く新城博士に出迎へられて同氏夫妻は京都大學天文臺へ來訪せられた。

此の日、午前中は、先づ天文臺の案内、それから新城博士と英子と自分と三人が同道して京都御所と二條離宮とを拜觀した。正午過ぎ、大學樂友會館で會食、此の時には上田、百濟、依田、伊藤、竹田諸氏も列席された。

食後、學内に少憩、撮影などした後、新城博士、上田理學士、英子及び自分はミラー氏夫妻を案内して洛西郊外に遊び、御室、仁和寺に少憩した後、嵐山の渡月橋畔に車を止め、小舟を雇つて、保津川の美しい水の上を上り下りした。可なり暑い日ではあつたが、いろ／＼と變つた所を見せたので、ミラー氏夫妻の心を満足させたと思ふ。

夕暮の頃、車を轉じて四條通りに來た時、日本のソロバンを買ふと言はれて、暫く街路上を散歩した。——午後七時頃、一同京都ホテルに歸着。こんどは吾々四人が御客となり、教授夫妻に夕食を饗せられ、九時頃辭し去つた。

教授夫妻は日本一巡の後、支那を経て、十一月頃スマトラに行かる筈。

雜報

●國際天文同盟の總會 世界大戰後に成立した國際天文同盟 (International Astronomical Union) は、第一回總會を一九一九年の七月、リギー國ブリュセルに開き、第二回總會をイタリ國ローマに開いたが、今年七月十四日より約一週間、英國の有名な大學町ケンブリヂ市に於いて其の第三回總會を開いた。日本からは平山(清次)、長岡兩博士が代表として出席せられたことは既報の通り。世界の各加盟國から集まつた代表者は總て二百名であつた。七月十四日 ケンブリッヂ大學セネート堂 (Senate House) に於いて、まづ開會式あり、大學總長バルフォア卿 (Lord Ralfour) は演説に於いて國際的協力の價值を論じ、ロイヤル天文學會 (Royal Astronomical Society) 會長ジーンズ (J.H. Jeans) 氏は古來の天文學が人の思想の進歩に貢獻したことを説き、又、勅任天文博士 (Astronomer Royal) ダイソン (F.W. Dyson) 氏は同盟が一九一九年に成立して以來の主要な事業を簡単に説いた。次に總會演説に、同盟總長カンベル (W.W. Campbell) 氏は天文學上必要且つ有効なるものは總て國際的協力によつて成し遂げられなければならないと説いた。此の演説によれば、天文學研究の主要な分野は數十の委員會に代表せられ、各委員會は天文全體にわたつて一様な研究系統を作るために國際的協力を以つて

行はれつゝある多くの事業の報告をした。カンベル氏は、國際協力の好例として、緯度變化の研究の歴史を述べ、今や吾人は協同研究に必要な條件を好く知つてゐるのであるから今後の新事業についても大なる望みを以て之れに當らなければならないと説いた。尙、カンベル氏は同盟成立以來の總幹事フアウラー (A. Fowler) 教授が同盟のために盡した大なる功績を稱揚した。

アベチ (G. Abetti)、クランチヤン (H. Christen)、ストラトマン (F. Straton) 中佐、アンロト (F. Henricus) 四氏が總會の記録掛に指名せられ、又、チャルフ (A. Wolf) 教授は平山信氏が不在につき、代りて副會長の一人に擢げられた。

報告によれば、ノルエー、スペイン、ポルトガル、スキスの四ヶ國は同盟に加盟し、又スキテン國も近く加盟することが公式に發表された。故に、今や同盟には二十二ヶ國が加はり、其の中の二十ヶ國が此の總會には代表者を送つてゐた。特選面積 (Selected Area) 委員會が本同盟内の一部として組織し直されるやうにこの希望が決議案として提出され、可なりの討論の後、米國の反對聲明のため、之れはドイツが同盟に加はるまで決定が延期されることとなつた。

同盟全體は、それから二十七個の委員會に分かれ、フアウラー教授の編纂した報告書によつて、四ヶ日間熱心な研究をした。其の結果の主なるものは左の通りである。

二四

標準符號 (Standard Notations) 委員會は、特別小委員會を任命して、北天星座の境界改訂に關し研究結果を後日に同盟へ報告させることにした。昔から、いろいろな系統が星座の境界に採用せられてゐたため、可なり混亂した命名が境界に近い星には與へられてゐるから。

コペンハーゲンの中央局から發せられる天文電報には、總て、其の年の初めの春分點を基準とした平均位置が採用されることになつた。又、新發見の天體には、必要ならば、適當な説明語が附加される筈である。

オランダ國のライデン大學天文臺長デ・シター (De Sitter) 教授に向ふ三年間毎年二百五十ポンドづつ提供することになつた。之れは赤道上及び南北兩半球上の或る天文臺に於いて星の方位角 (Azimuth) を觀測して、恒星の根本赤緯を決定するために用ゐられるためであつて、器械と觀測者とはライデン天文臺から得られる筈。若干の恒星が、定され、將來の連續觀測が推奨された。之れは遂に一つの新しい基本目錄 (Fundamental Catalogue) となるであらう。天空の各部分に於いて、一日中のいろんな時間に光線屈折の變動の研究が更に熱心に行はれるやうな希望が出た。又、グリーンウィチ (Greenwich) ケープ (Cape) マシントンの海軍 (Washington Naval) の三ヶ所の天文臺は、ドイツの天文家たちと協力して一九三〇—三一年のエロス星 (Eros) 近接期の觀測に必要な準據星 (reference stars) の觀

『日本に太陽觀測所を設けよ!!』

去る七月英國ケンブリヂで開かれた國際天文同盟の總會で、日本國に一太陽觀測所を設けられたいこの決議案が可決されたが、其の原文は左の通り。

“the study of the sun would be greatly advanced by a series of observations well distributed in longitude. A solar observatory in Japan would fit into the wide gap between Mount Wilson and Kodikanal, and it would make possible almost continuous observations of the sun, a possibility of importance in following changes in solar activity; and we would express the hope that in the near future such an observatory may be a reality.”

To contribute most fruitfully to the study of the relationship between the solar and terrestrial phenomena would require installations for direct observation, the measurement of solar radiation, and the concurrent observation of the variation in terrestrial magnetism.”

(譯)「太陽の研究は經度の好く分布された觀測が揃へば大進歩をする。日本に一太陽觀測所があれば、それはケルソン山とコダイカナルとの大きな間にうまくはまつて、太陽の殆んど連續觀測を可能にし、従つて太陽活動の變化を追及する要務を全うするだらう。吾人はかうした觀測に近い將來に事實となつて現はれんことを望む。太陽と地上との現象の關係の研究に最も大なる効果を齎すためには、太陽光線の測定や、地磁氣の變動の同時觀測など、直接觀測の設備を必要とする。」

た　　よ　　り

二八

山本先生

昨十三日ジャマイカ島のビケリング教授から葉書が参りました。葉書には一九二四年の火星衝の觀測は報告三十二として今冬發表されるそうです。ポピュラーアストロノミー八月には第三十回の報告が出て居りましたから何れ十二月號位になります。其の論文には私の完全な六枚連續の火星スケッチがビケリングやダグラス或はマチニニ同様に發表される事となつて居るそうで全く喜んで居ります。幾多貴重な發見のあつた昨年の衝に關する最も權威ある發表ですから待ち遠しく思ひます。

先月三十日三十一日の休暇に測定檢査した十三吋鏡の結果を原稿として同封しておきます。計算の結果間違ひなく遊星でも二重星でも申し分なく觀測出来るに分かつて來た時にはうれしくありました。未だ一年もありますが明年の火星の衝が待たれます。申し分の無い器械もそろつて居る事です。から。

九月十四日

早々

野砲二二聯隊 中 村 要

しふりて英子とエトワル附近、又、轉じてオペラ街あたりを散歩す。

十二月十八日(木)

朝十時、兩人でグランパレーの飛行機展覽會を見た。飛行術に最も得意なフランスの豪勢ぶりは羨しく感じた。

午後、ルーヴル美術館で中世の繪畫を見る。

十二月十九日(金)

かれてから思つて居たノートルダム塔の上へ、英子と二人で登つて見た。昨夜、ユーゴー作ノートルダム塔の活動寫眞を見たのが動機となつたわけなのだが、霧が多少空中にあつたため、遠方の景色はよく見えなかつた。

十二月二十日(土)

自分等は一月末の鹿島丸で歸朝する筈であるが、尙、暫く時日があるので、今暫くパリに滞在するさきめ、自分は今後毎日パリ天文臺へ行つて圖書室で讀書したいさう希望を、今日、天文臺の若いマヨール氏に頼んだ。

英子は英子で、時々、武林夫人方へ帽子の作り方を教はりに行く。

十二月二十一日(日)

朝、散歩して、近くのパンテオンを見に行つた。新しく祭り込まれたジヨレーの像もあつた。シヤヅンヌの畫も面白かつた。

午後は、もつと近いクルニー美術館を見る。外觀に似合はず、内容の夥しいのに驚いた。こゝに一五〇二年の銘をうつた天球儀があつたが、琴座に LYRA さまもな名が書いてありながら其所には鷺の畫が描いてあつたのは面白かつた。全く古いものゝ證據だ。

十二月二十二日(月)

今日から、いよいよ午前中パリ天文臺の圖書室へ通つて、讀書する此の日、ナハリヒテン誌で見た所によるミ、夏頃自分がハーブードで餘暇に研究した新變光星(グラフ氏発見一九二四・二四)は白鳥座 CH 星といふ名が附せられた。

夜、兩人で、始めてオペラを見に行く。題はアナトール・フランスの作つた「マイス」で、筋をかねてから知つて居たものだから、演技は

好く了解でき、愉快であつた。

十二月二十三日(火)

午前中は天文臺。——どうも獨逸系統の雜誌が充分に来てゐない。日和が好いので、午後は兩人でエトワルの凱旋門へ上り、景色を見た後、トロカデロからシヤン・デ・マルスまで散歩した。

ムードン天文臺のテランドル臺長より來書。

十二月二十四日(水)

午前中は天文臺。——午後三時からはフランス學院内の經度局へ行き、恰も例會のため集つて來た委員たちの中にムードンのテランドル臺長を見つけ、ごく暫く話した。明後日その天文臺を訪れる筈。

いよいよクリスマスが迫つて來て、四五日前からパリの街々は外觀が一變した。米國で見たやうな飾りつけのクリスマス・トリーは何所にも見當らないが、總ての店の店飾りは美しい贈り物で一ぱい、殊に又、人通りの多い街々の歩道には鐵引きの露店などが夥しく並んで、夜の散歩客を引きつける。自分等も、今日は七面鳥の代りにローストチキンを一疋買つて來て、晚餐の食卓を賑はし、夜は九時過ぎからイタリヤ、モンマルトルの街々を散歩した。

○九月號の訂正事項

頁	行	數	誤	正
347	掩蔽の標		Castellon	Constellation
352	25 番 目		Cen	CyB
々	31 々		Ap	Apl
々	33 々		みつかめ	みつかめ
353	長週變期光星 W Peg		23h 41m	23h 14m